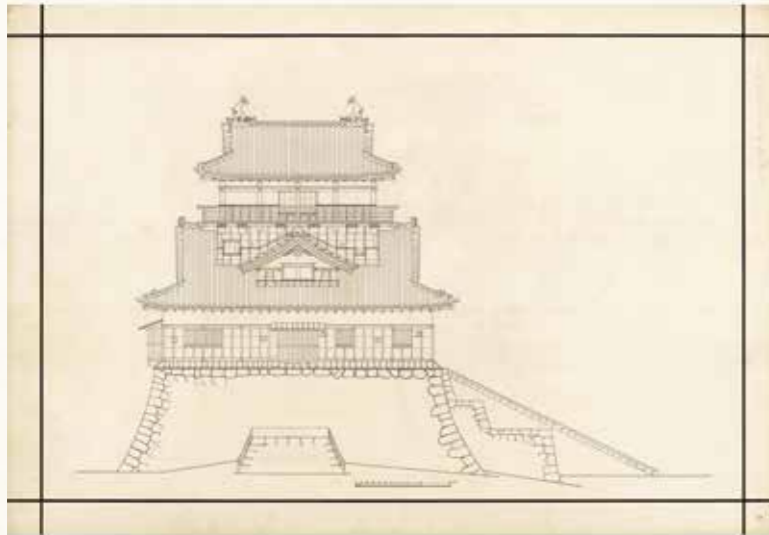


## 文化財建造物修理技師の先駆者・竹原吉助氏

昭和 15～17 年に行われた丸岡城天守の解体修理工事で、修理技師として携わったのが竹原吉助氏（1894～1986）です。竹原氏は明治27年に長野県に生まれ、宮大工に師事して古式規矩術まきしゅつを学びました。また、規矩術という日本の伝統建築における設計技術に長けた選定保存技術保持者でもありました。数多くの文化財建造物修理に携わり、善光寺本堂、法隆寺東大門、住吉大社本殿などの国宝建造物の修理も手掛け、現在の文化財建造物修理技術者の先駆者的存在でした。

竹原氏を知る人が「日本一図面が上手い」と言うほど精緻な図面を描き、丸岡城天守の修理工事にあたっては精密な実測図が作成されました。描かれた図面は戦前の天守の様子を伝える貴重な資料として、現在も国で大切に保管されています。

今回ご家族からいただいたのは、修理工事時に撮影された写真のガラス乾板。着工前や竣工時のガラス乾板は国に提出されていますが、工事途中を撮影したものが保管されていたことは非常に貴重なことです。



竹原氏が作成した丸岡城天守の図面。A0サイズの紙に墨で描かれた図面は、細かな部分や寸法が事細かに書き込まれています。パンフレットの背面図面も竹原氏のものです。（所蔵：奈良文化財研究所）

「丸岡城天守閣修理工事清算報告書（福井県保管）」

## 震災後の復旧工事に資料として活用

修理工事完成からわずか5年後、福井地震によって天守は倒壊しました。幸いなことに火災による焼失は免れ、再建を願って部材の解体・保管が行われました。昭和27年、念願の修理工事着工となり、このとき正確な修復の資料となったのが、竹原氏が撮影した膨大な写真でした。また、竹原氏は報告書の中で詳細な調査とそれに基づく考察がなされており、その後の丸岡城天守の研究にも重要な役割を果たしました。



福井地震で倒壊した天守（『重要文化財丸岡城天守修理工事報告書』（昭和30年）より転載）

### 〇あとかき〇

現在進めている調査事業では竹原氏が残した写真と福井県で保管されていた修理報告書が重要な役割を果たしました。調査にご尽力いただいた関係者各位に改めてお礼申し上げます。

平成30年11月 編集・発行

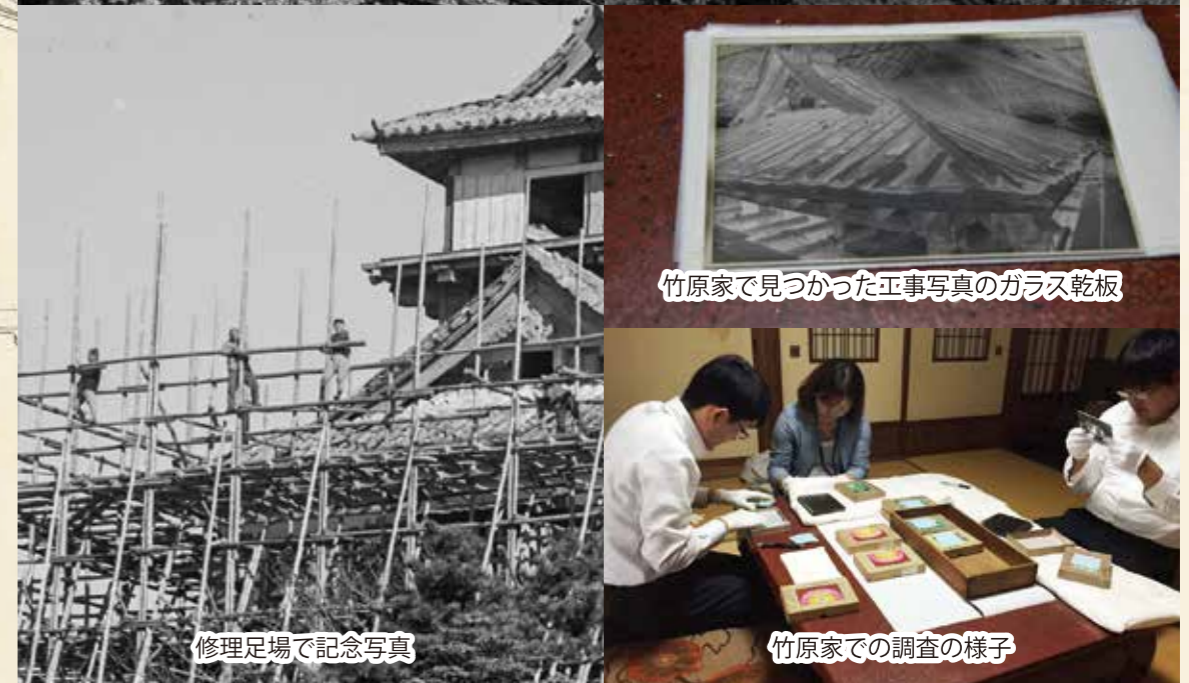
坂井市教育委員会 文化課 丸岡城国宝化推進室 | 〒910-0231 福井県坂井市丸岡町霞町 1-41-1  
TEL: 0776-50-2270 FAX: 0776-50-2553 E-mail: bunka@city.fukui-sakai.lg.jp

# 知られざる丸岡城

昭和15～17年に行われた解体修理工事の記録から



修理前の天守と修理後の天守



竹原家で見つかった工事写真のガラス乾板

修理足場で記念写真

竹原家での調査の様子

昭和23年の福井地震による丸岡城天守倒壊から遡ることわずか5年。昭和17年に天守の大規模修理が竣工しました。修理工事は昭和15～17年の約3年間行われ、今回の調査で当時の記録が発見され、丸岡城の新知見を得る大きな成果につながりました。

坂井市教育委員会 丸岡城国宝化推進室

## 昭和15～17年に行われた解体修理

昭和15年から約3年間、天守の解体修理が実施されました。記録によると明治34年に修繕工事が行われて以降、大規模な修繕工事がなされていなかったため、石垣の一部積み直しを含めた大掛かりなものでした。

修理にあたっては文化財修理の設計と監理を専門に行う技術者が、その結果を詳細に残していました。解体修理にあたった技術者は竹原吉助氏。竹原氏は数々の国宝建造物修理に携わった修理のスペシャリストでした。今回の調査事業では、竹原氏が撮影した166枚におよぶ工事写真と、竹原氏が書いた修理工事報告書がそれぞれ竹原家と福井県庁で発見され貴重な資料となりました。

## 修理工事報告書の記述と見つかった写真

修理工事報告書と写真を撮影した技術者が同じ人物であったため、報告書の内容を補足するように写真がそろっていたことは、調査を進めるうえで大変貴重な資料になりました。今回そのなかから、報告書の記述とそれに伴うと思われる写真の一部をご紹介します。(これを基に復元した姿はパンフレットNo.1をご覧ください。)

【略】現在の三層の縁は旧、腰屋根であったが腕木上には長板の天井を張り土台上の小屋及出格子屋根と同じく厚板二枚重ね目板張の屋根であったと推測される。



解体に伴う調査によって、3階廻り縁が元は腰屋根であったと指摘しています。写真では三階の床の高さから伸びている腕木の先に加工の跡がある様子が撮影されています。現在は板で覆われているので、確認することはできません。

【略】一層内部の柱五本が掘建であった事に就ても別項に言及した所で当初より掘建であった事は疑いない所である。【以下略】



中央列の柱は昭和12年に掘立柱の部分を切除して礎石建てに改められました。修理工事当時は柱の根元部分にコンクリートが充填されており、その上に板石をかませた状態でした。一方で掘立柱の下には礎石も確認でき、建築当初は掘立柱でなかった可能性も考えられます。

【略】鯨は旧木製漆塗に金箔押ししたもの、如く上重東妻の内から発見した尾部と思われる断片によって想定される。



屋根裏で発見された鯨の一部と思われる木片。鯨は安政五年の地震で破損し、修理されていました。保管していた修理前の鯨を撮影したと思われます。

【略】瓦下には尚旧の柿板葺(長一尺二寸厚一分以上葺足五分乃至八分)が残って居た。当初のものか否かは明瞭を欠くが地方的に見て当然の施工と見る事が出来る。【以下略】



天守ができた当初は石瓦ではなく、長さ30センチほどの板を葺くこけら葺きだったようです。こけら葺きの様子を写した写真はいくつか確認する事が出来ました。

【略】巴瓦は無地のもの而已であったが掛瓦の中に一、二巴形を陰彫したものがあり居り床下又は仮設工事中地中から旧のものを発見したから新旧共にこれを彫刻した【以下略】



修理工事当時、軒瓦に巴は彫られていませんでしたが、床下や地中から巴紋が彫られた瓦を発見し、当初は巴紋があったと推定しています。発見された軒丸瓦が撮影されており、三つ巴がなく、円だけ彫られたものもあった事がわかります。

【略】今南北出し部屋の鬼石に残って居る紋章を見るに圓内に三つ葉の立葵を示して居る。これを本城関係の城主に見るに本多家の定紋である事が明らかである。【以下略】



石瓦がいつの時代からかについては、鬼瓦に立葵の紋があることから、本多氏の時代にこけら葺きから石瓦葺きに改められたのではないかと推測しています。立葵紋の鬼瓦が撮影されていました。実物は今回の調査で天守床下から発見されました。

【略】入口の石階段に就ては【中略】自然石を以て築造した石階段が一度中段の石垣場を踊場として左に曲折して入口に向かったものである事は今回旧階段の一部発見によって略推定し得る所があり【以下略】



現在の入口石階段は後の改造で、本来は屈曲する自然石の階段があった事が書かれています。写真は現在の石階段の北側にある石垣を解体した様子と思われる。自然石の階段が確認された事がわかります。